

## 前史（原文 58 ページ）

Old Equitable、あるいは彼自身の言葉でいうと、「全ての生命保険に関わる人がこんなにも良く知っていて、と同時にこんなにもよく知らないこの会社」、について、今まで出版された最も完璧な記録は故 Cornelius Walford によるものだ。

彼は続けて言っている。「Equitable の歴史はこの国の生命保険の歴史だ、と言われている。それがたとえ厳密には正しくなくても、知らない人が想像するより遥かにそれは真実に近い。」正確さを保障するためには（現在行なっているようなこの会社の始まりについての概観だけでなく）、この会社のすべてのことについて誰かが会社の文書庫に自由に入出入りして何でも見た上で（そんなことはどの会社でも外部のどんな人間に対しても、たとえそれがどんなに信用できる人間であっても許すことではないだろうが）書かなければならない。このようなことが出来なかったためだろう、Walford の記述には多数の誤りがある。さらにそれは2世代も前に書かれているので、彼は時折今日ではあまり注目しないような欠点を強調している。

### コメント（30）

ここで書かれている「誰かが会社の文書庫に自由に入出入りして・・・」ということが実現して、Equitable 創業 200 年目の 1962 年に「Equitable Assurances」という本が出版されています。書いたのは Ogborn という著名なアクチュアリーで、Equitable のアクチュアリーを長年つとめ、また保険数学の教科書を書いたりもしている人です。この本は 300 ページ近くもあるちゃんとした本です。この本の前半に、Equitable の創業期のことも詳しく解説してありますから、私も参考にしました。また Equitable の最初のオフィスのあった場所を示すプレートもこの本に載っているのをコピーしました。

しかしながら Walford の本は最も賞賛に値するできであって、特に最近 Mr. F.J. Maclean が「Human Side of insurance」の中で風刺したものと比べると、はるかに信頼できるものだ。今度はこれ（Maclean の本）について見てみよう。

1. アクチュアリーという専門職についての最高権威である William Morgan について、彼は無頓着にも「Dr. Price の甥の Morgan という名前の新しいアクチュアリー」と書き、Morgan がどのように保険料率を下げたか語る。彼はさらに Morgan がいかにして生命保険会社を成功に導いた最初の人となったか、どのようにして彼が valuation（責任準備金の計算）と reversionary bonus（累加配当方式の契約者配当）システムの創始者になったのか書いても良かったはずだ。あるいは彼は保険数学を確固たるものにした Morgan の書いたものに、彼が Royal Society に提出した論文に、彼が会員総会で行なった生命保険とその準備金についての理論についての今でも最高水準の演説に言及しても良かったはずだ。

しかし明らかに Mr. Maclean は昔の Gallio のように、これらについては何の関心も示さず、その代わり年老いて気弱になった Morgan のおしゃべりを引用したが、それについてはもう述べた。

### コメント（31）

ここの所もちょっとわかりにくいですね。

聖書を読んでいるクリスチャンであればすぐにわかるんですが、Gallio というのは聖書の使徒行伝の 18 章に出てくる人で、そこでは使徒パウロ（キリスト教の創始者のような人です）がギリシャで布教活動をしていた時、現地のユダヤ人が彼を捕まえて犯罪者として Gallio の所に引っ張って行ったのに対し、現地の行政のトップだったガリオは全く無関心だったという話が出てきます。

共同訳の聖書では「使徒言行録」の 18 章で次のようになっています。

<sup>12</sup>ガリオンがアカイア州の地方総督であったときのことである。ユダヤ人たちが一団となってパウロを襲い、法廷に引き立てて行って、<sup>13</sup>「この男は、立法に違反するようなしかたで神をあがめるようにと、人々を唆しております」と言った。<sup>14</sup>パウロが話し始めようとしたとき、ガリオンはユダヤ人に向かって言った。「ユダヤ人諸君、これが不正な行為とか悪質な犯罪とかであるならば、当然諸君の訴えを受理するが、<sup>15</sup>問題が教えとか名称とか諸君の立法に関するものならば、自分たちで解決するがよい。わたしは、そんなことの審判者になるつもりはない。」<sup>16</sup>そして、彼らを法廷から追い出した。<sup>17</sup>すると、群衆は会堂長のソスネテを捕まえて、法廷の前で殴りつけた。しかし、ガリオンはそれにも全く心を留めなかった。

このガリオンというのが Gallio のことです。

これで昔のガリオのように「全く関心を示さなかった」という表現になるわけです。

このガリオという人は、ローマの有名な哲学者セネカ(小セネカ、哲人セネカ)の兄で、また有名な雄弁家のセネカ(大セネカ)の息子です。

2. Edward+Rowe Mores について彼は「職業的な(by occupation)古物収集家(antiquarian (antiquary か))」と書いている。趣味に関して「職業的な(by occupation)」と言うのは、ちょっと普通ではない。この学者肌の地主はそういう言い方をするのであれば「職業的な印刷屋」と行っても良いかも知れない。というのも、彼は活版印刷術についても権威のある書を物しているのだから。
3. 「最初のパトロン兼理事(パトロンというのは良いが 15 人にいた理事のうち、パトロンだったのは一人だけだ)は Lord Willoughby de Parham (Parham の Willoughby 卿)であったが、彼はその時引っぱりだこの貴族的な guinea-pig であったようだ」と書いているが、Oxford English Dictionary によると financial guinea-pig とは「1ギニー(1.05 ポンド)のフィーを受取る人・たくさんの会社の取締役になることで生活している人」という意味だ。

Equitable の理事会では、会議のたびに出席した理事に総額 40 シリング(2ポンド)のフィーを払うことになっていたが、そのフィーは午前 11 時までに出席して会議の最後まで残っていた理事の間だけで分けられることとなっていたので、理事が 15 人全員出席したとすると一人あたり 2 シリング 8 ペンス(0.133 ポンド)になるフィーは、遅刻したり早退したりした理事には何も支払われなかった。Willoughby 卿が貴族の地位にいたことからすると、彼は会議には出席できなかっただろうから、どうしてこんなことが言えるのかわからない。

Royal Society の副会長であり、古物収集家協会の会長でもあった人について、こんな不真面目なことを言うのはふさわしくない。大デュマ(三銃士やモンテ・クリスト伯等を書いたフランスの小説家)はこんな隠喩を使っている。「草の葉のてっぺんから神を呪っているアリ」

Maclean はもうちょっとイングランド人(とはいえ頑強な長老派ではあるが)に対して兄弟らしい親切さを示しても良いのではないか。

## コメント (32)

この「草の葉のてっぺんから神を呪っているアリ」というのは、これだけじゃ何のことかわかりませんよね。イギリスやフランスでは良く引用される部分のようですが、この前後を山内義雄訳「モンテクリスト伯」から引用してみましょう。

「おお人間よ」と、ダヴリニーがつぶやくように言った。「あらゆる動物のなかでもっとも利己的なもの、あらゆる生物のなかでもっとも身勝手なものである人間。地球が回転するのも、太陽が輝くのも、死が鎌をふるうのも、すべて自分ひとりのためだと信じているところのもの。一茎の草の葉ずえにとまりながら、神を見くだし、神を呪う蟻のようなもの！

では、命をねらわれた人たちのほうは、なにも失わなかったとでもいうのでしょうか？ サン・メラン侯爵夫妻も、ノワルティエさんも……」

デュマの「モンテクリスト伯」という小説も有名ですね。日本では「巖窟王」という名前でも知られている小説です。これは無実の罪で海の中の小島の監獄に閉じ込められた青年(エドモン・ダンテス)がそこを脱出、無人島の宝をみつけて自分を監獄送りにした仇に一人ずつ復讐していくという話です。その仇の一人、自分の保身と出世のために青年(ダンテス)を無実の罪で監獄送りを決めた検事(ヴィルフォール)が、その後出世して検事総長か何かになっているんだけど、その奥さんが連続毒殺犯になっていて、自分(ヴィルフォール)と前妻との間の娘も殺そうとしたことがわかり、いよいよ身の破滅……というクライマックスの一つです。

毒を盛られた人の治療に呼ばれたお医者さん(ダヴリニー)が検事総長(ヴィルフォール)に、誰が犯人かを告げようとして、この、家族を次々に殺されそうになっている検事総長(ヴィルフォール)が「自分だけが被害者だ」などと言ったのに対して、お医者さん(ダヴリニー)が上のようにつぶやいたという部分で、いかに人間が自分勝手に自己中心的で、自分だけが偉くて何でも知っていると思込んでいることか、という意味で引用される所ようです。

4. 200年近くも誤って信じられてきたことと違って、Mr. Maclean は我々に Old Equitable は 1762 年に「特許状を取得した」と保証している(注: 強烈な皮肉です)。彼はまた(Mr. Mores があれほど熱心で、彼だけでも十分だったことにも、および Sir Robert は会議に一度も出席しなかったために理事に再任されなかった4人のうちの1人であることにも関わらず)「実際に働いた理事は Sir Robert Glyn と Sir Robert Ladbroke だった」と言っている。さらに彼は最初のアクチュアリーは William Mosdell ではなく、会社の主たる創設者の長男の James Dodson Junior だったといっている。(注: これだけ嘘が連発されているとなると、著者の怒りもわかりますね。)
5. 入会金に関する紛争は「最初の(2番目の?)回の基金拠出者による、保険金 100ポンドあたり 15 シリング(0.75 ポンド)の追加的ボーナスを支払えという要求」と誤って解釈されているが、そのような要求は実際にはなかった。
6. いよいよ Mr. Maclean のとんでもない努力について書こう。毎週の定例理事会にきちんと出席した理事に対して支払われる、総額 40 シリング(2ポンド)の報酬は、同様に招集された理事会についても、また会員総会にきちんと出席した理事にも支払われた。

しかしこの最後のものは 1771 年 12 月に総額 5ギニー(5.25 ポンド)を、理事であろうとなかろうと、年4回の四半期総会および年次総会に会議の始まる前に到着した最初の 21 人のメンバーに分配するように変更された。この結果、3ポンド5シリング(3.25 ポンド)を年に5回、総額 16ポンド5シリング(16.25 ポンド)追加で払うことになった。

今日に至ってもまだ保険会社を含む多くの会社で行なわれている、定足数を増やすために主要道路やわき道を探しまわるやり方と比べると、これは天才のなせる技で、堂々たるものだった。

【原注: Equitale の初期の総会には会員があまりにも大勢集まったので、そのため2つ目のオフィス New Bridge 大通りの Chatham place の北東の角に作らなければならなかった——そこは今 Blackfriars 駅になっていて、Hand-in-Hand's のオフィスに面している——理由の一つは内部の階段が総会の時の圧力に耐え続けることができなかったからだ。】

この「事実在即した」という文は現実感を欠いているので、Mr. Maclean は表現力を増すために、「理事会は最初に時間内に到着した 21 人に5ギニーずつ払うことにした。」とまで断言している。総額が 105 ギニーを年に5回払うと、年に 550 ポンドを超える額を余分に払うことになる。実際にはたったの 16 ポンド5シリング(16.25 ポンド)なのに。

このような彼の行き当たりばったりのやり方で、Mr. Maclean は若い会社がどうやってこんな支出を賄うことができるのかなんてことを考えてもいない。勝手な想像を逞しくする前に、そんなことが可能かどうか考えた方が良くだろう。

#### コメント (33)

この所かなり皮肉たっぷりに Mr. Maclean の書いたものを非難していますね。著者は Equitable に愛着がある分、Maclean の嘘八百に我慢がならなかったんでしょうね。

ところでここに「ギニー」という言葉が出てきましたが、これは1ギニー=1.05 ポンドというお金の単位です。イギリスの通貨は基本的に銀貨なのですが、このギニーというのは金貨で、ちょっとかしこまった時などに使われたものようです。

### 印紙税 (原文 63 ページ)

1774 年に印紙税が引上げられたので、Old Amicable は契約1件あたりの手数料を6シリング6ペンス(0.325 ポンド)に上げた。その時 Equitable の手数料は保険金額によらずに7シリング6ペンス(0.375 ポンド)だったが、1776 年 7 月に8シリング6ペンス(0.425 ポンド)に引上げられた。その他の証書のように、証券を受取る人が間接的にではなく直接的にそれを払わなくても良い理由はないように思える。

#### コメント (34)

ここで言う「印紙税」というのは、保険証券を発行するときにかかる税金ですから、新契約時にだけ必要となるということで、1回目の保険料と一緒に払込まれる手数料の中に加算されたようです。なお印紙税は後の方で家族収入保険の仕組みの話の所でも登場します。

日本では皆ひっくるめて予定事業費の付加保険料にしてしまうのですが、ここでは保険証券に貼る印紙税は、その証券を受取る契約者の負担ということにしているようです。ちなみに Equitable の保険料計算には予定事業費はありません。入会金と加入時の手数料の他は全て保険料(純保険料)です。

### 相互債務 (原文 63 ページ)

我々は会社の初めのうち、十分なファンドが貯まらないうちに死亡率が困った状況になった時、会員は一時的な資金供給(会社に対する貸付け)の要請を受けるかも知れないことをみた。そのような資金提供はあったとしてもほんの少額のものだろうと見積もられた。というのも、定款によれば債務やそれに伴うペナルティはメンバーの名義で預けられている貧弱な基金から補充されることになっていたからだ。一時的な資金供給は、(a)会員の保険金額に比例して、(b)保険の区分によりたとえ1年定期保険の契約の場合は終身保険の場合に比べて1/6になる、という具合に決まっていた。契約を解約して預託金が没収されることを受入れるのであれば、この資金供給の義務を逃れることができた。

さらに死亡した時に、その保険金支払いが他の会員によって保証されていることの代償として、Equitable の保険に入る全ての者は、Equitable の会員でなければならない。そしてその保険が続いている限り、会員であり続けると誓約しなければならない。そして彼は Equitable のルール

に従わなければならない。

この会員による「Equitable を維持する」という契約は、疑いもなく時折理事達が契約の「解約を承認した」理由だ。そしてこの文言は、理事の一人である Coleman 大通りの聖 Stephen 教会の聖職者 Anthony Webster D.C.L. の契約のうちの一つが解約された時も同じであり、その際代わりの契約に対する入会金を免除すること以上の特別な取扱はなされなかった。

一方解約返戻金は気前の良いものだった。それは予定死亡率がかなり高かったからこそ妥当といえるものだったが、そして今日の実務と異なり、定期保険の場合も自由に解約返戻金が支払われた。

契約の初めから解約返戻金が保証されている契約というのは、最近の発明だと考えられているが、そうではないことは 170 年前にそのような契約が少なくとも 1 件あったことからわかる。

#### コメント (35)

ここを見ると、新しい保険会社という制度を作るにあたって、コレデモカという位にいろいろ考えられていたんだなあということが良くわかります。実際にはかなり高目の死亡率を、高過ぎるとわかった上で使っているんで、保険金の支払ができないなんてことにならないと確認しているにもかかわらず、「万一不足する時は」というルールをあらかじめ用意してビジネスをスタートさせるというのは大したものです。

そしてこちらへの配慮は、実は Dodson が Equitable を作るにあたって保険料計算の仕組みを解説している論文に、すでに詳しく説明されています。そこまでの準備をしないとなかなか他人に理解してもらうのが難しかったということかも知れませんが、本当に大したものです。

ここで解約返戻金の話が出てきました。解約返戻金はどのように計算したのかわかりませんが、Equitable では最初から解約返戻金を払っていて、掛捨ての定期保険についても解約返戻金を払っていたということがわかります。その後掛捨ての定期保険については解約返戻金を払わないようになったような書きぶりですが、アメリカでも何年か前に掛捨ての定期保険で解約返戻金を払うようになり、そのための責任準備金の計算を大幅に変更しなくてはならなくなった時、大騒ぎになったのを思い出します。

日本では、少なくとも私が生保業界で仕事をするようになった今から 30 年くらい前から、率は小さいとはいえ掛捨ての定期保険でも解約返戻金はちゃんと払うようになっていて、そのためその後その解約返戻金の活用をめぐる大きな商品開発が行なわれたのですが、それはこの本の話とは別の話です。

このような相互債務は、共同保険式の生命保険会社の初期の頃としては当然のことながら、必須のものだった。そのことのため 2 回目以降の保険料の領収書は「acquittance receipt (責任免除領収書)」と名づけられていた。

前述の領収証の写しの帳簿でもそのように呼ばれていた。そしてその帳簿に(同じく Mores の内規にも)1768 年 3 月以降の期間について、誤って単位を書きもらしたわけではない証明として、シリングとペンスの欄の空きスペースはゼロで埋められた。たとえば £27 8 6 (27 ポンド 8 シリング 6 ペンス)の代わりに £27 08 06 とした。

#### コメント (36)

27 ポンド 8 シリング 6 ペンスというのは、正しく書くと £27 S8 P6 となりますが、S や P を省略して £27 8 6 と書くことがあり、そうするとどこが区切りが明確でなくなるので、£27 08 06 と、スペースをゼロで埋めたということのようです。10 進法であれば小数点以下は全ての桁について、なければゼロとするのはあたり前の話なのですが、20 進法・12 進法で異なった単位が使われると、ちょっと面倒なことになります。